第347号　昭和49年5月10日発行（毎月10日発行）
定価一部 100

昭和49年（1974年）
5月号（No. 347）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

本文・行事報告
上高地山岳研究所利用規定決まる… 1
秩父宮学術賞を頂いて…辻村太郎… 1
尾崎さんの山歩き……串田孫一… 2
戸澤英一君……藤島敏男… 2
小島烏水の註文帳……渡辺公平… 3
木暮友枝さんのこと……小野　幸… 3
第5回山岳図書を話る夕べ……河野悠二… 4
登山用語を検討する（第3回高所登山委員会）……池田常道… 5
ソビェトのアルピニスト達と①（U.I.A.A 1973年10月）……田村俊介… 6
（続）青年登山家のための国際トレーニングキャンプ参加報告書……新潟大学山の会… 7
第12回「この一本展」③…… 9
自然保護委員会……11
図書紹介
『ヒマラヤ編年誌』I…望月達夫… 9
近代登山の先駆者たち……10
霧の旅（覆刻版）……10
会務報告
3月理事会……10
図書室便り（49年3月）……10
ルーム日誌（49年3月）……11
新入・復活会員等（49年3月）……11

上高地山岳研究所 利用規定きまる

六月十日オープン

昨年十月完成した日本山岳会上高地山岳研究所は、その後、山研運営委員会によって、具体的な運営方法が検討されてきたが、このほど、その利用規定が制定された。

山研は全会員の協力と努力が結集されてできた、みなさんのための施設ですから、利用に当ってはよくこの規定を守り、お互い同士気持ちのよい生活ができるよう運営に協力していただきたいと思います。六月十日オープン。

上高地山岳研究所 利用規定

日本山岳会

本研究所（以下山研と略称）は登山知識と技術等の研究向上と会員相互の懇親をはかるなどの目的のために建設されたものであります。利用を希望される方は次の規定をよく守り気持のよい山小屋生活を味われますよう願っております。

一、開設期間

・毎年五月中旬～十一月初旬（年によって若干変ります）

二、利用出来る者

本会の会員（団体会員にあってはその代表者）を優先し、余裕のあるときは非会員にも快よく開放いたします。ただし非会員にあっては必ず会員一名の紹介を必要とします。

三、利用実費

山研の運営にあてるため次の実費をいただきます。

・会　員　一、〇〇〇円
・非会員　一、八〇〇円

四、申込み

・申込先
東京都文京区湯島一―六―一
日本山岳会内山研運営委員会

・申込方法
1、住所、氏名、会員番号、利用希望日（非会員にあっては紹介会員の氏名と捺印）を記入し申込金五〇〇円（現金または小為替）を添えてお申込み下さい。（電話でのお問合せには応じますが申込みは受付けません）
2、申込金はご都合で取消された場合返却いたしません。

・申込受付
利用希望日の六十日前から受付けます。ただしウェストン祭等本会の諸行事、およびシーズン中とくに希望者が多い場合は三十日前に受付を締切り、抽籤などの方法により決定させていただきます。ただしこの場合会員優先となりますからご諒承下さい。

五、炊事

食糧は各自が携行し、主食の調理は管理人が一括して行ないます。

六、その他

1、掃除は便所、浴室、台所等共同施設を除き利用者が各自で清掃して下さい。
2、その他別に定める管理規則をよく守って下さい。

昭和四十九年四月一日制定

秩父宮学術賞を頂いて

辻村太郎

明治三十九年山岳会の会員になった私は、小島烏水論を読んで日本アルプスの高山を知り、その年の七月に木曾の上松から駒ケ岳に登り、赤穂に降って飯田から神坂峠を越え中津川に出た。山岳第一年の第一号には小川琢治氏の山岳の成因と、山崎直方氏の高根の雪という記事がある。小川先生の解説は程度の高いもので、ジュースやウィリスなどの地質学者、ペンクとデーヴィスなど地理学者の名も出ていた。山崎先生の文章は清新の気に満ち、自から踏査された東部アルプスの最高峰グロースグロックナーの写真が挿入されている。

第一高等学校に入った四十一年の十一月、神田美土代町の基督教青年会館で、東京地学協会主催のスウェン・ヘディンの中央アジア探検談を聞いた。ヘディンその人の口から語られるタクラマカンやムスタグアタの地名は私に大きな感銘を与え、地学の研究に生涯をゆだねる望みを抱かせた。地質鉱物の広瀬教授が紹介されたズーパン地文学第四版から影響を受けたが、この本には今日多くの山岳人が知っているカラコルムのビァフォ・ヒスパー氷河も記載され、アレッチ氷河とラウターブルンネンの氷蝕谷、侵蝕平坦面を頂く天山イシガルト山脈の小さな写真も見られた。

大正五年に東京大学地理学科の大学院で、山崎教授に指導され、陸地測量部修技所の講師を振り出しに、東京高等師範学校から東京大学地理学教室に移って、昭和二十六年に退職するまで、ずいぶん長い年月のあいだ地形学の授業をつづけたが、その間に成しとげた仕事はまことに微々たるものである。しかし石槌や阿寺の断層崖を見つけ、安曇盆地や諏訪湖の地溝、木曾山脈と赤石および飛騨の巨大な地塁に注意を向けたことに、多少の満足を見出すべきであろうか。

私の母は津田梅子先生の門弟で、津田塾大学の前身女子英学塾に勤めた国漢文の教師であり、特別な旅好きであったから、明治三十八年に共にした富士登山を手始めに、四十一年に神河内から平湯を経て富山に向い、大正五年に三宅島を見せ、六十代になってから南は雲仙と霧島および開聞、北は十和田と八甲田から摩周と阿寒の景色を楽しむ機会もあった。かつてアメリカの大地形学者ウィリアム・モリス・デーヴィスは米国地質学会のゴールド・メタリストとなった時の謝辞を、同会の報告で述べ、幼な児が母の膝もとに走りよって、はしなくも貰った珍しい品物を示す悦びの情にたとえたが、このたび秩父宮家の御紋章を金色で示した

銅製賞牌を眺めた私の感想は全く同様であり、風樹の嘆を新たにした次第である。

それにつけても日本山岳会の方々に、種々の点で厄介をかけたことを忘れ得ない。一高旅行部が産れた当時からの友人日高信六郎氏には、昭和六年の国際地理学会議の折に世話をして頂き、オーヴェルニュー地方のエキスカーションを果すことができた。モンドール火山の頂上にあるカールの底で、氷河に磨かれた岩石を観察したことが、翌年のぼった仙丈岳で同じ岩形を見つける機縁となっている。本場のアルプスで沢山のルンドヘッカーなどに接しておられた槇有恒氏から、私は穂高山の涸沢圏谷にある氷蝕岩形を教えられたのは、神河内ホテル建設の相談で、二人が大倉喜七郎氏に遇った時のことと思う。（昭和四十八年三月受章）

尾崎さんの山歩き

串田孫一

山歩きの古い記録を、戦争の時に焼失してしまったため、正確な年月日は分らないが、多分昭和四、五年の秋だったと思う。どんなところでも、とも角山みちを歩いていたい時期で、土曜日の午後は殆んど毎週、学校から戻ると、前の晩に用意をしておいた荷物を背負って、駅へと走った。

その時は、三峰から雲取へと歩く計画で上野駅へ急いだ。発車間際の列車に乗って、空いている座席に腰を下ろすと、まん前に河田槇さんが腰かけておられた。私はそれより以前に河田さんに紹介され、中央線の大月の近くのカンバ沢山へ同行させて戴いたことがあるので、この偶然が嬉しかった。

私は親戚の年上のものと二人だったが、河田さんの方にも一人お連れがあった。それが尾崎喜八さんだった。中学の二、三年の私を河田さんが何と言って紹介して下さったか記憶にないが、小柄な外国人のような尾崎さんに挨拶をすると、急に堅苦しい気分になった。河田さんは、始終にこにこして私にも何やかやと話しかけたり、また尾崎さんとも極めて気楽に話をしておられたが、私は紹介されたばかりの尾崎さんとはどんな話をしていいものかも分らず、かしこまった気分は容易にほぐれてくれなかった。

後から調べてみると、高井戸での生活から、再び東京の京橋、新川へ移られた頃で、後年尾崎さんはこう書いておられる。「こういう時期にはからずも未知の登山家河田槇氏の『一日二日山の旅』や『静かなる山の旅』を読んで感銘をうけ、やがてその人と相知るに至ったのは天恵だった。私は彼に案内されて遠近の山へ行くようになり、その紹介で「霧の旅会」という登山団体の会員にもなった。失った武蔵野の代りに山岳という一層広大な世界を得、私の詩に文章に山がその実体と雰囲気とを提供した。登山によって救われた私はそこに精神のための新しい支柱を見出し、自然への愛と傾倒とを一層深くした。」

この時、秩父の奥深い山へと、多分淡々とした容子で入って行かれた二人の大先輩を、何処でどんな気持で見送ったかを、正直に言って記憶していない。二人を乗せた小型の乗合バスの、赤いテールランプを、闇の中に立って見送ったような気もするが、それはむしろその時の私の気持の、一つの投影かも知れない。

尾崎さんは既に『空と樹木』『高層雲の下』『曠野の火』の詩集をはじめベルリオーズ、ヴィルドラック、ロマン・ロランの訳書を出しておられたが、中学生でもあり、詩に対する関心の殆んどなかった私は、それらの本を手にする機会もなかった。

だが昭和十年に『山の絵本』が出版された時には、こちらも山に関する本をかなり読み、また文学についての興味も深まって来ていたので、出版される前から予約をして熟読した。私もその頃は一番山に強く牽かれていたし、その仲間には文学好きな者もいたのでこの本からの影響は大きかった。詩集『旅と滞在』も書架に並んだ。

人を訪ねることには極めて引込み思案の私も、ある夜尾崎さんの井荻のお宅を訪ねた。高須茂さん、勝見勝さんたち数人が集まっておられ、ロマン・ロランの会の話をうかがった後に、俳句をつくらされて閉口したのを憶えている。山の話も当然あった筈なのに、その方の記憶は全く残っていない。

それ以後、二、三度は井荻にお邪魔していたが、尾崎さんが私にとってもっと近い存在になったのは戦後の富士見時代からである。八ケ岳の山麓を歩き、釜無の谷を溯った。私も自然の勉強がおもしろくなって来た頃だったので、一日こうして歩くと、教えられる花や鳥や昆虫などの名前で、私の手帖はいっぱいになるほどだったし、夜になると星の勉強があり、オルガンとともに多くの歌を聴くという。正にその一日一日がはち切れそうに充実したものだった。

三、四日の滞在ではあったが忘れ難くその後も理由をつくっては富士見へ自然の実習に出掛けた。そして野良仕事をしている人たちに謙虚な態度で声をかけ、河原での中食には、流れに李を冷やし、平らな石を選んで、清潔なハンカチをひろげて、テーブルクロースにし、それらすべてが、手まめで行き届いていて、尾崎さんらしい「やり方」であった。

一般に、平素はかなり几帳面な人でも、山に入るとそれが難しくなり、むしろなげやりになり勝ちであるが、尾崎さんの山歩きにはそういう変化の現われが全くなかった。普段でも、私などには到底真似の出来ない、綿密な仕事振りであったが、山道での気の配り方、神経の使い方は一層細やかで、一つの山行から得られたものの数は、有形無形のものを併せて、想像以上だったと思われる。

その独得の気質は亡くなる直前まで崩れることがなかった。

（一九七四・二・一九）

× ×

戸澤英一君

（一八九八年―一九七三年）

戦後の会員名簿から戸沢君の名は消えているが、元の会員番号は三二九番。ずいぶん古くからの会員である。大正二年（一九一三年）十一月入会。彼が府立一中の三年生の頃である。若い時から山と植物がよほど好きだったに違いない。昭和十七年の会員名簿にはまだ載っているところからみれば、中年以後健康上、山登りから遠ざかってはいても、JACから離れて行くようなことは、なかったとおもう。戦後の混乱時代に整理されたのか、或は自ら退会したのか、その辺のところはわからないが、ずっと在籍すれば、永年会員制の定められた時、いち早くその中に含まれたひとりであったろう。一高時代には黒田正夫、大島永明（永年会員）の両君と旅行部委員をつとめたくらいで、既にあちこちの山に登っていたのであろう。私が彼と行をともにしたのは大正六年の針ノ木――劔――白馬が始めて、以来いくたびか記憶に残る山々へ彼とふたりきりで、或は他の仲間も加えて登った。

『山岳』には十三年三号・丹沢山塊十四年三号・会津駒ケ岳、十八年三号・苗場山雑魚川大沼池、二十年一号・両神山父不見西御荷鉾、などの寄稿がみられる。彼の山歴はいまこれを詳らかにしないが、所謂信飛甲駿の高岳、秩父奥山、上越の山と数はともかく広い範囲に及んでいるようだ。

先輩では武田久吉博士と最も親しく晩年までよく訪れては、閑談にふけっていた。博士歿後『山岳』第六十七年に私の頼みを容れて、春田君や私の追悼記の足りない点を補うように、武田博士の一面がよく描かれた一文をよせてくれた。その文が活字になったのが一九七三年の夏、そして三ヵ月後十一月初旬、恐らく晩年彼が力をいれていた古美術行脚の旅先であったろう、京都の宿で腸閉塞のため急逝との知らせを受けて、私は茫然自失、言葉もなかった。享年七十五歳。

現在会員籍になかったとはいえ、今日からみれば創期会員といってもおかしくない戸沢君の訃を、JACの会報にでも書きとめておきたいと考えて、敢て私はここにペンをとった。

略歴。京橋育ち、一中、一高、東京帝大、日本興業銀行、富士自動車KK社長、富士重工業KK監査役、相談役顧問、KK鉄道会館取締役

（一九七四年三月十日

藤島敏男記）

小島烏水の註文帳

渡辺公平

「近代登山の先駆者たち」展が終ってからのことだが、長い間手にしなかった山の本に陽を当ててやろうと思って四、五冊ひっぱり出した中から、新聞の小さい切抜きが一枚こぼれ落ちた。

見出しを見ると「登山者の註文帳小島烏水」とある。新聞は東京日日か、東京朝日かよくわからない。日付は十一月二十一日と赤エンピツで書いてあるが年号がない。それがはさまっていた本などから想像するとだいたい昭和四年ごろであろうと思う。

原稿は四百字二枚半ぐらいのもので、おそらく学芸欄あたりに掲載されたものだろう。

この切抜が展覧会の中にも出されていたのもわからないし、小島さんの著書のどれかに採録されているか、それもわからないが、興味のある注文をされているのでその一部だけを紹介してみたい。すでに著書の中に収められているのならムダだから没にしてもらってもいい。

ぼくの不勉強をさらけ出すことになるが、とにかく会報編集者にまでこの一文を送ることにする。

注文の第一は日本の山の文献のことで、

「冨士などは別として、日本アルプスを中心とした、近代的登山に関しては、いずれクールソッジのやうなアルプス史家が出て、材料も整頓せられることになるだらうが、日猶浅いに拘はらず、文献は、日に失なはれんとしてゐる。最も汎く読まれた志賀重昂氏の『日本風景論』すら古本屋でも滅多に見られないし、ウェストンの『日本アルプス』は稀品になった。

まだしも諸山岳会の機関誌など、大抵取り揃へられるかも知れないが、貴重なのは、山岳地方の古新聞雑誌、例へば『信濃博物学会雑誌』だの『飛騨史壇』など、東京では『博物之友』(これは今の武田久吉博士等の少年時代に学生たちの編輯に成ったもの)など得難い文献になった。その蒐集を今のうちにやって置かないと愈々以て心細くなる」

最近は図書委員会などの努力で、この小島さんの注文に応えるような実績があげられているように思われるが、なおいっそうのご活躍をお願いしたいものである。

もう一つは山案内のこと。前記の文章に引き続いて

「これに関聯して登山に功労ある案内者の写真や伝記である。英国では『パイヲニーアス・ヲブ・アルプス』(単行本)などに傑出した案内者の纒まった列伝があるが、日本でも上高地の嘉門次、黒部の品右エ門などの履歴は、蒙昧にせられやうとしてゐる。嘉門次などは、私たちの仲間でも、随分多く写真を撮った方だが、今では方々問ひ合せても、一枚も保存してないといふ有様である。」

僕らの知っている山案内でさえもうほとんどが故人になっている。最近偶然なことから、昭和のはじめ鉄道省の肝いりで、主な山小屋の経営者を東京に集めたときの記念撮影写真を新聞の先輩からもらった。対山館の百瀬さんや、五千尺の丸山さんなど懐しい顔が見られるが、十人のうち現存している人はもうなさそうである。

山案内として明治末から昭和の初期にかけて活躍した人々の写真と履歴ぐらいは早く整備し、現在も健在という老人たちからはその貴重な話でも聞いておかなくてはなるまい。

この他、地形・地質図や動植物の分類図などにも言及されているが、最後に「もっと、当面的な仕事」として、山小屋のことにふれている。

「山中小舎の物価の統一も必要だが『食堂』や用器の不潔、飯の炊き方、お菜の拵へ方の不親切から来る不味さなどの注意と改善、冬季登山者や、スキイヤァのために、特殊の設備ある小舎の建設などは、その土地の繁昌にも、影響することだから、所轄地方官民の考慮を促したく思はれる。」

この文章が発表されてから四十五年ほどたったわけだが、ごく一部を除いて山小屋の食事のまずいこと、用器の不潔なことなど、余り大きな改善がなされていないことなど周知の通りである。こうしてみると半世紀近くにもなるのに、大先達の注文に少しも応えていないじゃないかということにもなる。

最後に小島さんは「私が日本山岳会の関係者であるところから、そんなことは註文者自身が、註文せられるべきものだろうと、打ちこんでくるものがあるならば、私は註文帳を懐中にねじ込み、黙って戸の外へ出るであろう。二度出直して来るために」とその文を結んでいる。

それはこの註文帳の書出しがつぎのような文章ではじまっているからである。

「山の季節は終ったが、楢火の傍で、胡座をかきながら登り足りなかった山の話を、高声で仲間と話し合うというやうな気持で、註文帳を持ち出す。」

× × ×

木暮友枝さんのこと

小野幸

故木暮理太郎会長令夫人、友枝さんは昭和四十八年の秋ゆかれました。私ども東京都庁職員の仲間内では夫人を「木暮先生の奥さん」で通じあっておりました。

私は昭和十年、東京市役所へ入って、木暮先生のご指導を何かとうけるようになりましてから、ちょいちょい先生のお宅へうかがわせていただくようになって、奥さんにお会するようになりました。その頃は先生にお会いするために参上いたしておりましたので、奥さんには季節のごあいさつを申しあげるだけでありました。

その頃のお宅は、東京市牛込区市ケ谷台町十八番地でありました。玄関をあけますと、真正面に本棚があり、その中には先生の関係されておりました市史編纂室で出される「東京市史稿」が何十数冊もずらりとならんでおりました。あの本は厚い本なので、床がさがるのではないかと心配しておりました。

奥さんと親しくお話し申しあげはじめましたのは、先生がなくなられ、戦後間もなく実兄の野田九浦画伯宅に落ち着かれてからでありました。吉祥寺の野田邸はまわりが竹やぶでかこまれており、近所の人も「雀のお宿」と申しておりました。門札も別に「木暮」とあり、本宅を通らず、直接奥さんの家屋にも行かれましたので、庭から直接うかがっておりました。私の参上するのは、たいていつとめが終ってからの夕方なので、お嬢さんの美枝子さんもおられることが多かったのであります。その頃のお話しに「市内で戦災に会い、木暮のものはほとんど焼いてしまいました」と申されておりました。食事事情のわるい時でしたが、「おかえりは成田で遠いですから、ごいっしょにいかがですか」といわれ手づくりの夕食をいただくことが常でありました。

先生の所蔵本はなくなられてから、日本山岳会と東京都に分けて寄贈されました。山関係のものは山岳会、その他の本はほとんど都庁に運ばれました。しかし、ご承知のように山岳会へ寄贈された分は、虎ノ門の事務所と共に焼け失せてしまいましたので、そのころ吉祥寺のお宅には「山の憶ひ出」と先生の所蔵本ではスタイングらいしかありませんでした。

昭和二十五年、木暮理太郎先生の七回忌の席で私はリリーフを奥秩父に建ててはと提言しましてから、私たちの石楠花山岳会は神谷恭さんの霧の旅会とはかり募金をはじめましたときは、奥さんにもいろいろとお世話になりました。除幕式は翌二十六年金峰山麓の金山で行われることになりましたが、お体の具合も考えて、その前にリリーフの披露会をお茶の水の日本山岳会ルームをお借りして行いましたとき、奥さんは、ご兄弟の方々とよろこんで参加してくださいました。その後、昭和三十三年十五回忌に、お嬢さんの美枝子さんと現地の金山へ行かれたのは、私たちも、ほんとうにうれしく思いました。

奥さんは明治十九年六月十四日に生まれられました。木暮先生が仙台の第二高等学校時代のクラスメートに野田鶴雄さんという方がおられました。奥さんはこの方の妹でありました。

明治三十八年から数年、先生には

「ハガキ文学」編集時代がありますが、そのお仲間の太田三郎画伯は生前よく私に「木暮の奥さんは女子大生の頃からよく存じていました。野田九浦や川端竜子などが私の絵の仲間、友枝さんは野田の妹さんだったんですよ。賢夫人でしたよ」と申されておりました。太田さんは帝展で活やくされて後、名古屋の美術館長になられ、退職されてから東京の武蔵野市で自適のくらしをされておられましたが、数年前ゆかれました。

木暮先生のおつとめ先の市史編纂室を中心として歌の会がつくられ、その顧問格で入られていた歌の同人誌「にひはり」に奥さんも寄稿されたことがあります。

明科にて
水きわにポプラ並立つ養魚池の
こゝら紅鱒餌に集ひ寄る
六つの池に水はわかれて流れ入る
三寸の鮎六寸のます
養魚池に水流れ入り流れ出づ
ひめますこゝに鮎はかしこに
明科の照る日は強し養魚場に
はたらくわ子の腕はやけたり
ゆく舟も筏もあらず連山を
うつして広し信濃犀川

汽車にて
秋草の乱るゝ甲斐路汽車走る
裾野遠引く八ッ岳を見て
甲斐路来て野生七草見出でたり
色の深さよはぎも桔梗も

バスにて
亡きわこと旅せし夏を忍びつゝ
露うすれ行く山あひを縫ふ

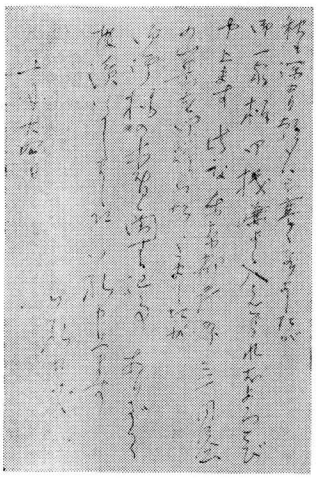
以上の歌は同誌の昭和十一年十月に発刊された号の中にあります。歌中の三番目の「わ子」は長男の岳彦さん（大正三年生れ）でありますが、昭和二十年三月、硫黄島で戦死されます。そして最後の歌の「わこ」は二女（大正八年生れ）でありますが、この方も昭和九年病死されます。

昭和四十八年十月、丸善展を前にして、奥さんのなくなられたことを知り、美枝子さんにおくやみのお便りをさしあげました。そのご返事、

「おはがきありがとうございました。母へのお悼みのお言葉ありがとうございます。十月十日とうとうなくなりましたが、安らかな死でございました。小野様には、いろいろお世話様になりながら、その後、御無沙汰申上げ、大変失礼いたしました。このたびもまた、父の百年祭に沢山の資料を御提供下さいましたそうで、有難く思っております。昭和四十八年十一月一日」

をいただきました。かつて、木暮先生も「にひはり」によせられた歌のひとつ「鳥啼かぬ原は淋しやたそがれて至佛が嶽に夕月かゝる」をふと思いうかべました。そして、今さらではありませんが、年月の流れの早さをしみじみと感じました。奥さんのごめいふくを心からおいのり申しあげます。

（四九・二）



おはがきの本文（昭和37年）

第五回山岳図書を語る夕べ
――島田巽氏を囲んで――

図書委員会の主催で二月二十七日午後六時からルームで開催された。近藤担当理事より同委員会の近況報告、講師の紹介が行なわれたのち、島田巽氏は、山の本との最初の出会いなど大正末期からの思い出から話をはじめて、大要次のような話を約一時間半にわたって述べられた。

▽私が昭和五年に本会に入会した折の、紹介者は藤島敏男、松方三郎の両氏だった。藤島さんとの縁は丸善での本探しからで、以来、次第に深みへ導かれて行くことになった。松方さんには、本会創立三十周年記念の山岳図書展の折りに大いに鍛えられた。私の入会五年目のことで、松方さんの采配で展示用の資料集めなどをやったが、数多くの本のなかから選択する的確さといい、図書目録のための文献の解説にあたっての、知識の豊かさといい、松方さんの処理ぶりの鮮かさは、私を驚嘆させた。この間、問わず語りに教えられたことが多かったのは、ありがたかった。このときの図書展目録は、今日でも役立つ立派なものだと思っている。

▽人それぞれ、時代によっても、最初にめぐり合った山の本は異なるが、私の場合は、大正十二年に刊行されたばかりの「登高行」第四年と、槇さんの「山行」とであった。本会創立の原動力となった大先輩たちの本よりも前に、槇、三田、大島の諸氏の文章に触れたことは、探検時代を素通りして、いわゆる近代登山の魅惑にぶつかったようなもので、これも一つの時代性かと思う。

▽こんな折に、はじめて読んだ山の洋書はアーノルド・ラン著「The Mountoins of youth」（一九二五年）だった。この辺も、ウィンパーなどを読む前に、スキー登山の先達ランの本にめぐり合うという変則ぶりだった。しかし、ランの他の著作にはその後もいろいろ教えられた。ことに山の詩文のアンソロジー「The Englishman in the Alps」（一九一三年）は永年の伴侶となった。

▽近ごろ、魅力のある山の本が少なくなったという話をよく聞く。いわゆる遠征記録といったものが型にはまって来たせいだと思う。英国あたりでもそういう批判が出ている。その点、私が注目していたのは、あの「South Col」（一九五四年）を書いたウィルフリッド・ノイスだった。これは浦松さんの訳で広く読まれているが、ノイスがこれを執筆するときの態度が自序のなかに書かれている。ノイスは、やや型にはまって来た遠征記にあきてきて、自分は個人的な体験、個人的な表現を主としようと決め、さらに、自分は文章と詩によって山と自分との関係を描いてみようと考えた。たしかにノイスには、そのような天賦の才があったのであろう。その後のトリヴォル初登頂に関しては、このカラコラムの一峯を、「To the Unknawn Mountain」（一九六二年）という書名のように、未知の山という普遍性を備えさせて、未知へのアドベンチュアを描き出そうと試みた。ノイスのこれらの文筆活動に私は、新鮮な山の文学の創造を期待していたが、一九六二年、パミールの山で遭難してしまった。

▽ノイスは右記の本を書く折に、G・W・ヤングの「Covrage and Mountain Writng」と題する文章を念頭に置いたと述べたが、それは「Mountain World」一九五五年版の巻頭を飾ったものである。ヤングは周知のように第一次大戦前にアルプスで不滅の足跡を残して、英国山岳会の重鎮であった。その著書「Oh High Hills」（一九二七年）などは、登攀記の代表作とされていたし、詩人でもあって、文章に対する態度は常にきびしかった。ヤングはこの一文のなかで、山の本を読む読者層の変化とか、山登り自体が変って来た今日、書く方も出版する方も何か考えねばならぬとして、学会の年次報告みたいな没個性の文章でなく、もっと個性的な人間的な色彩を加える必要のあることを指摘する。そしてヤングは、安易に文章をつづろうとすると、とかく記憶に残っている先人の文章の二番煎じになりがちだとして、推敲を重ねているうちに自分独自の表現が生まれることを説き、山に登るエネルギーを持ち、それを書こうとする精神にあふれる人なら、退屈な本を書くべきではないという。勇気をもって自分自身を描き出せ。ヒューマンでありパーソナルであることが永遠性を持つものだ、というのが、ヤングの結論なのである。

▽ヤングは第一次大戦で隻脚を失いながら、一九二七年、五十一歳で再びアルプスへ向い、義足でモンテ・ローザやマッターホルンなど四千m級に登って、その紀行は「Mountain With Disference」（一九五一年）にまとめられた。それらの著作の邦訳のないのは残念だが、戦前、本会会員としてライブラリーの整備に努められた黒田孝雄氏（戦没）による「登山談義」（一九三八年）にはヤングのことが詳述されている。

▽エリック・シプトンも私の好きな

著書である。その著書「Nanda Devi」（一九三六年）はヤングによっても非常に高く評価されている。かつて一九五一年の英国祭の折、ロンドンの百書選定展にも、これが選ばれていたのを、松方さんと眺めたのを懐しく思い出す。

▽ヤングなどというと、古典的すぎると受けとられがちだが、昨年読んだマイクル・ワードの「In This Short Span」（一九七二年）は、題名そのものが、ヤングの詩からとったもので、若くしてヤングを訪問した折の印象なども記されている。このエベレストその他の遠征に参加した外科医の著者は、ヤング自身はアーティフィシャル・フライミングはきらいだし、科学的に走りすぎて魂を忘れているといって叱りつけたりしたが、皮肉なことに、岩に挑む若い連中の間で、ヤングの文章が今日も愛好されて、ヤングは自分たちの味方なのだと、彼の詩などを引用したがる、と記している。このワードの言葉を私は面白いことだと思った。断片的なとり上げ方で、二、三の本と著者に触れて来たが、何か山のよい文章を評価するという一つの伝統のようなものが生きていることを感じとっていただければ、ありがたい。

以上がこの夕べの話の概要であるが、最後に島田氏は、この会合のためにいろいろ資料を引張り出している間に「登山とスキー」の昭和八年九月号に、「登山文学のために」という自分の文章を見つけたこと、それにマロリーの言葉などを引用して、山の文章論などを記していたことを語って、四十年前と自分の知能水準が進歩していないのに驚いたと苦笑しておられた。話のあと雑談形式でなごやかに歓談をつづけたが、山岳図書に関心をもつ新しい会員の出席も少なくなく、蔵書なども持参されて話がつきなかった。

（河野悠二）

当日の参加者はつぎの通り（順不同）

田辺主計、交野武一、牧野四子吉、牧野文子、山崎安治、横山厚夫、菅野弘章、笠原正明、越田和男、滝川清、松家晋、村井米子、岩瀬皓祐、河野幾雄、望月達夫、和久井正明、伊藤博夫、鈴木實、堀内章雄、野口未延、大橋晋、武田満子、油谷次康、河野悠二、近藤信行、斉藤かつら、渡辺公平、大野俊夫

登山用語を検討する

――第三回高所登山委員会――

一九七四年二月八日午後六時
JACルーム
金坂一郎、望月達夫、山崎安治、中島寛、原真、安間荘、川上隆、広島三朗、浅見正夫、浜野吉生、神崎忠男、池田常道、以上十二名。

現在、わが国で用いられている登山用語は非常に混乱している。いわゆる近代登山そのものがヨーロッパからの輸入ものであるためか、知識が拙速に取入れられた結果、用語そのものに対応する概念の規定が曖昧なまま、数多くの外来用語が乱用されている。また訳語についても各種各様のものが流布していて、一体どれを使用すべきか判断に迷うことも多い。

こういったものを体系づけ、整理し直すという試みは、過去何回かあったが、いずれも一つの完成された形として残されなかったため、極部的な問題提起の域を出ていない。わが登山界には、いまもって信頼に足る登山用語辞典がない。多くの登山者は断片的知識によって、自己流の解釈の下に用語を使用しているのが現状といえる。

今回の会合は、このような登山用語を整理し、スッキリした形にまとめようとする試みの第一歩である。

衒学的態度で登山用語のアラ捜しをすればきりがないが、それは本意ではない。要は登山上の意志伝達がスムーズに、しかも正確に行なわれるよう、体系に基づいて用語を整理・検討し、その結果として一つの登山用語辞典をまとめ上げようというのである。もちろん用語というものは、登山技術の発達に対応してその意味も変化し、新語も誕生するわけであるから、その辞典には定期的な改訂作業が行なわれなければならない。

会合は中島寛氏の司会によって、まず問題点を列挙することから始まった主な論点はつぎのようなものである。

第一に外来登山用語の訳語や解釈が不適当と思われる例が多い。中には誤用を重ねた結果として、原語の意味とは全く異なったものとして使われている例もある。アンカーとビレイ、ホールドとスタンスなどはその例であるし地形用語のルンゼ、クーロワール、バットレス、リッジ、レッジ、テラスなども、考えてみればかなりいい加減に使われていることがわかる。

このようなものは用語と概念を厳密に対応させず、曖昧なまま使用することによって起こる。

また英語をはじめ独、仏、イタリア語、スペイン語など多種多様の外国語が混在することから、同じものに対していくつもの用語があてられたり、二ヵ国語以上を混成した和製用語がかなり使われている。ひどい例では、九ミリ以上の太いものがザイルで、八ミリ以下の細いものがロープだ、などという説明が行なわれたりする。ザイルパーティやロックハーケンなどは、すでに一般化してしまった。

仲間うちだけに通用する隠語的表現や極端な省略語も問題とされた。例としてはキス（キスリング）、プス（ホエーブス）、バシュー（オーバーシューズ）、人工登攀にかけるロープの「プラス」「マイナス」などがある。

討議の結果、思いのほか多くの問題点が出てきたので、とりあえず大項目に分類した上、それぞれについて検討することになった。

それは①地形、②登山技術と登り方③用具、④雪氷、⑤気象、⑥医学および高所生理、⑦その他一般用語の七項目である。このうち①、②については次回までに叩き台となる用語のリストアップをしてくることにし、①は中島②は浅見が担当することになった。

検討の作業を行なうには、そのための基本方針と、出典を明らかにしておかなければならない。そこでつぎのようなものが採択された。

まず方針としては、

一、日本語を第一に用いること。
二、慣用表現を尊重する。
三、翻訳不能のものは英語を使用。
四、二ヵ国語以上の混成はしない。
五、商品名は使わない（ラジウス）。
六、隠語的表現や極端な省略語は廃止する。
七、学術用語については、あくまで登山に即して考える。

また文献としてはつぎのようなものがあげられた。

1. "Mountain Craft", G.W. Young
2. "The Complete Mountaineer", George D. Abraham
3. "Mountaineering", The Lonsdale hibray, Sydney Spencer
4. "On Climbing", Charles Evans
5. "A Dictionary of Mountaineering", R.G. Collomb
6. "Encycropaedia Dictionary of Mountaineering", Peter Crew

ドイツ語、フランス語の文献についてもいずれ検討が必要となろう。

登山用語の問題は、はじめ『山岳』編集上の問題として出てきたので、とりあえず『山岳』のための原稿執筆要領を作成することとし、近藤理事、中島の二人が担当して、次回までに原案を作成してくることになった。

高所登山委員会がこのような主題に深入りしすぎることは本筋ではない。しかし山に関する文章を書こうとする程の者なら、現在のような登山用語の混乱を見過す訳にはゆくまい。達意の論文を書こうとすれば誰でもがこの問題に頭を悩ましはじめているのが実情であろう。そんな訳で本委員会が用語の問題を取りあげたのは、ごく自然のいきさつからであったのだが、実際にはもっと広く呼びかけ、この問題のみを主題とする用語委員会のごときものが出来て、そこで処理すべき事柄であろう。そんな意味も含めて望月、山崎の両氏にも出席をあおいだ次第であった。なんとか近い将来にそうした気運が山岳会の内部に生れ、しかるべき成果があがるよう努力しなければならない。

（池田常道）

訂正 本誌三四四号 四頁 二段目「会員通信」欄 川崎精雄氏の「神威岳」の文中、前より四行、佐藤幸彦博士とあるのは、佐藤敏彦博士の誤りにつき訂正おわびいたします。

ソビェトのアルピニスト達と ①

（ＵＩＡＡ、一九七三年十月）

海外連絡委員　田村俊介

一九七三年十月二三―二九日の間、ソ連邦グルジヤ共和国トビリシで開催されたＵＩＡＡ総会に、鈴木郭之氏と出席した。会議の内容については、鈴木氏の公式報告（前号）のとおりである。また世界のアルピニストとのコンタクトについては、鈴木氏がソ連以外のアルピニスト、私がソ連のアルピニストのことを書くことにした。

＊　＊　＊

十月二三日、モスクワのドモジェドヴォ空港を飛び立った。空から見下ろすモスクワ郊外の大原野は雪で白一色に被れている。機は約一時間半後に、カフカス山脈上空に差しかかっていた。それまでは雲海の上を飛んでいたのだが、山脈に近ずくと空に切れ目ができ、豪快な岩壁や氷壁、その間に横たわる氷河がかい間見られる。しかし雲は全ての山頂を包んでおり、山々を個別に判別することはできない。機内は俄に騒然となり、窓を覗き見ようと、多くの人が座席から立ち上った。その中には一九六九年のブラハのＵＩＡＡで会って見憶のある人達もいた。前会長のアルベルト・エッグラー、スペインのゴンザレス・エリオットなどで、ソ連ア連盟のギペンレイテルも同乗していた。カフカス山脈を飛び越えると三十分程でトビリシに着いた。暖かかった。寒風吹きすさぶモスクワは気温は零度まで下っていたのに、機の塔乗口より一歩外へ出ると、空気が全く柔かだった。ここは緑の木立ちの中である。空港にはソ連ア連盟の元老アバラーコフ、会長ボロビコフ、事務局長アヌフリコフ等々が出迎えてくれた。グルジヤ山岳会の人達もいた。どこかで会った人達だと思って話してみると、全員が一九六六年に袋一平氏と横浜山岳会の交換登山で、日本にやって来た人達だった。ＪＡＣがその時松屋サロンで催した、グルジヤ登山隊歓迎パーティに私も出席したので、彼等の特長ある顔には見憶えがあった。ＵＩＡＡ参加者にあてがわれたホテル・イベリアは、ここ二～三年前に建てられた新しいホテルである。私達の部屋は十階で東に面していた。窓から眺めると、すぐ眼下にクラ川が町を縦断して流れている。グルジヤ独特のレンガ色の屋根がわらが緑の木立ちの中でよく調和しており、南国に来たことを実感させられる。クラ川の屈曲部の岸の上に円錐の屋根を持つずんぐりした特長あるグルジヤ教会の寺院が見られる。

私達の隣りの部屋には、ソ連山岳界の最長老のヴィタリー・アバラーコフとドイツ語の堪能なガルフがいた。ガルフは外国の山、とくにヒマラヤにおける外国隊の事情に詳しく、その筋のソ連の第一人者である。アバラーコフはソ連山岳界の象徴的存在である。夕食に行く時、廊下で彼に声をかけられた。彼にはモスクワで数回会っている。彼はいつも、凍傷でほとんど指のなくなった手で、圧縮機のように握手する。そのたびに、こちらの手の骨がごりごり音をたてる。彼は日本人がカンチェンジュンガ西峯とＰ29に登頂したことを高く評価していた。そして、私達もヒマラヤに行こうとしているのだが、日本人のお陰で登るところが無くなってしまった、と付け加えた。またこの遠征で犠牲者が出たことについて、こう云った。山に登る限り、とくに初登頂を試みようとする限り、犠牲者が出てもそれをとやかくいえるものではないと。私は、一本も毛のないつるつる頭の、今年六七歳になったアバラーコフと話しをすると、暖かさを感じながらもいつも孤独になる。彼は家族も友人もなく、唯一人雪山の中に立っているような厳しく孤独な雰囲気を、いつも漂よわせているからだ。しかし彼には奥さんも、子供も、多分彼のためには全てを投げ出すであろう多くの友人や弟子がいる。黙っている時は、彼の眼は鷹の眼のように鋭いのに、笑うと目元が赤ん坊のようになる。いつもトレーニング・シャツにだぶだぶの黒ズボン。歩く時は、びっこをひきながら、足にスプリングが入っているように、ぴょんぴょう跳ぶように歩く。パミール、天山、カフカスのほとんど全ての困難な山々に足跡を残し、ソ連のアルピニズムを率いて来た、ソ連山岳界の第一人者といっても誤りはなかろう。山に全生涯を捧げ、そして未だ山への情熱は彼の五体から迸り出ている。

アバラーコフとガルフの部屋の隣りには、ギペンレイテル夫妻がいた。ギペンレイテルは、ソ連ア連盟の渉外委員、私の一番親しい友人である。私は彼と会うといつも、口癖のように、カフカス第一の名峯の麓の山村メスチヤに連れて行くことを要求していた。今回のＵＩＡＡのプログラムにはメスチヤの旅が組み込まれていた。しかしこれは悪天候のため実現しなかった。そのかわり、後述するブドウ酒の産地カヘチヤに行くはめになってしまう。彼はトビリシを去る時、私を哀れんで、メスチヤ山村の浮彫り彫刻をプレゼントしてくれた。

二三日はＵＩＡＡの参加者のレギストレーションを行うため、ホテルからすぐ近くのキーロフ公園の中にあるグルジヤ山岳会に行った。山岳会は新装成った鉄筋建てのビルの中にあった。私の一九六四年のトビリシ訪問時にはこの建物はなく、山岳会は公園の片隅にあり、木造の緑のペンキに塗られた一戸建ての家であった。山岳会の入口でエウゲーニ・シーモノフに会った。シーモノフはソ連山岳文学の第一人者で、日本でいえば故深田久弥先生に相当する人である。ゆっくりした口調、白髪でいつも顔にほほえみを浮べた、穏かな人である。昨年の秋、彼の家に夕食に呼ばれ、後述するポリヤコフと一緒に、パミールに雪男は存在するか、かつて高仙芝の大軍が通ったと言われる、アシリクリ湖（ビクトリヤ湖）沿いのパミール路の鳥もとまらぬ岩壁に、当時の宝物が隠くされており、その宝物を探しに行ったと言う遠征隊の話など、聞かせて貰った。シーモノフには故ユウゲーニ・アバラーコフ（前述のヴィタリ・アバラーコフの弟）の伝記「山を行く男」、ソ連のナンガ・パルバッドと云われる大量遭難を出し続けた最北の七千ｍ峯、ピーク・パベーダの登攀記「謎の山」、最近作では「山に憑かれた男」などの著書がある。また、ソ連ア連盟の出しているアルピニズム年鑑の編集も行っている。彼といま訳出中のクルィレンコの「未踏のパミール」のことなど立ち話しした。

クラブの中で、グ山岳会の秘書をしているタマーラさんに会った。彼女には一九六四年にクラブを訪れた時、旧山岳会の建物を案内してもらったり、グルジヤのブドウ酒を土産に頂いたりし、見ず知らずの私であるのに、大変親切にして貰った。私達は手を取り合って、九年振りの再会を喜び合った。彼女は写真を受け取ったと大変喜んでいた。これは、一九六四年にこの公園内で撮った写真を、一九六六年に来日したグルジヤ山岳会の人に託して送ったものであった。それを一九七三年に礼をいわれた訳である。彼女の娘さんも、もう二十近くなり、今は学校で英語を習っており、今日も受付で活躍していた。

クラブの中では山岳写真展が開かれていた。パミール、天山、カフカスでのソ連のアルピニストの活躍が写真で紹介されている。会場の片隅には、数個のガラス張りのボックスが置かれており、グルジヤを訪れた各外国隊の贈物が展示されている。その中には日グ登山隊のペナントやその記録「カフカスの山旅」などもあった。

午後、グルジヤのスポーツ新聞「レロ」のインタビューをうけ、翌日われわれ日本人の来グのことが報道された。

夕方、グルジヤ山岳会の来日した一部の人達が、鈴木氏と私をレストラン「アラグヴィー」に招待してくれた。食卓はグルジヤ料理とグルジヤのブドウ酒であふれた。グルジヤ人はブドウ酒（一五―一八度）を水のように飲む。話題は主として彼等の日本での回想であった。しかし、話のふしぶしに、日本とグルジヤのこれまでの友好関係をさらに発展させたいという気持ちが滲み出ていた。それは次のようなことであった。袋先生が亡くなられたと同時に、日本とグルジヤの関係も糸を断たれたように薄らいでしまった。しかし最も困難なことは礎石を築くことで、私達はそれを成し遂げた。だから、日グの友好関係をさらに発展させるのは、そんなに困難なことではないだろう。私が袋先生の後を継いで海外委のソ連担当をやっているのなら、ぜひこれをさらに前進させて欲しい。具体的

なことは私がモスクワにいることだし、じっくり一緒に検討したい、ということであった。私は、もちろん、できる限りの尽力を惜しまぬことを約束した。また、日本の山、カフカスの山に一緒に登った横浜山岳会の人達にくれぐれもよろしく伝えて欲しいと云われた。紙面を借りてお伝えしたいと思う。

二四日は常任委員会が行われ、常任委員でない国の人達と市内見学をした。昨夕の招待の主であったグ山岳会の会長セルゲイ・タバタゼが所長をしている、山間の木立の中に建設中の野外古代グルジヤ博物館を訪れ、古代グルジヤの住居などを見学した。ここで中央アジヤのタシケントからやって来た、ラツェクに会った。ラツェクは中央アジヤ歴史地理に造詣の深いアルピニストである。著書に「レーニン峯登攀記」「中央アジヤの街道を行く」等がある。今回のUIAAには、大学に通っているという娘さんを連れて来ておられたから、相当の年配の人である。私は、かねてより、現在ソ連領に入っている天山およびパミール地域をかつて通過した人々（アレキサンダー、玄弈、高仙芝、マルコ・ポーロ等）のルートをソ連の研究成果とヨーロッパのそれとつき合せて見たいと思っていた。例えば玄弈は天山を凌山で越えたというが、これは果してどの峠を指すのかという問題等である。ラツェクはそれについて実に明解に回答をくれた。また、その他、中央アジヤ探検史について、ソ連側で明らかにされている事実で、ヨーロッパの説と全く異る多くの点など興味深く話してくれたが、これは別の機会に譲りたい。

カズベク山（筆者撮影）

前述したポリヤコフとも、道中、見物は二の次にしていろいろ話した。彼には「最後の七千m峯」という著書があり、また彼が作成したソ連の七千m峯登攀年表をJACの会報に訳して載せたことがあった。彼は今「ソ連の七千m峯登頂記」を書き上げ、印刷に回してあるので、一読して興味あるなら、訳してくれという。ポリヤコフは、一九二〇―三〇年代のパミールの開拓者クルィレンコ遠征隊の生き残りが二人いるが、その中の一人だそうである。彼はクルィレンコの「未踏のパミール」に写真の原版を提供してくれることを約してくれた。

二五日、午前中総会。総会が終り、グルジヤ・テレビ局より何か話してくれと頼まれる。お膳だては全てアギ・アバシッゼとテレビ局でやってくれる。アギ・アバシッゼは訪日したグルジヤのアルピニストで、言語学者、英語が堪能で、日本語も五十ぐらい語いがある。僅かの日本滞在期間に、イザナギ、イザナミノミコト、アマテラス大神等の神話まで仕入れている驚くべき人である。インタビューではグルジヤ語で、トビリシの印象、これからのグルジヤ岳人との交流などについて問われた。私はアギの指示するとおり、グルジヤ語の質問に日本語で答えた。私は、この地は一九六四年訪問して以来のなつかしい所で、私の前にJACの海外委をされていた袋一平先生の努力で、グルジヤと日本の岳人の交流が実ったこと、今後グルジヤと日本の岳人の交流について、できる限りの尽力をしたい等と話した。

夕方、ホテル「トビリシ」のレストランで晩さん会が行われた。食卓には小豚の丸焼きやグルジヤ料理がのせられ、無制限のブドウ酒の乾杯で大いに賑った。各国代表にまじり、鈴木氏もお礼の言葉を述べた。十一時半からニュースで、今日のテレビのインタビューが報ぜられるとアギが言っていたので、晩さん会の後、ホテルに帰り、地下のバーへテレビを見に行った。そこにはすでに、エッガラーやらスイス山岳会、ドイツ山岳会の連中がたむろしていた。テレビで今日のインタビューが報道され、皆に大いにひやかされた。鈴木氏の話しでは、私のことをMR・TVと言っているとのことだった。

（以下次号）

東海支部通常総会のお知らせ

左記の要領で東海支部の通常総会を開催いたしますから支部員各位には万障繰合わせてご出席くださるようご案内申しあげます。

記

▽日時　一九七四年六月一六日　午後四時

▽場所　愛知県勤労会館（電話〇五二―七三三―一一四一）

▽議案　一九七四年度の活動について

（浅見正夫）

（続）

「青年登山家のための国際トレーニングキャンプ」参加報告書

新潟大学山の会

（Ⅲ）クリミア大会における感想

2、ソ連邦の岩登り技術等について

(1)各共和国では、本大会出場のため、あらゆる方法で訓練を行っており、全選手とも非常に高度な技術をもっている。

(2)トレーニングでは、スポーツマスターの管理の下に、あるひとつのもの（例えばチムニー登り）を完全にマスターしたのちにつぎの段階（例えばクラック登り）へ進むというような方法をとっており、グレードの概念もこの方法に基づいて生れたものと考えられる

(3)アルピニズムのうち、とくに岩登りについては、スポーツマスターの手による教程書が作成されており、これによって一定の採点を行なっている。（この教程書は露文のものをもらってきたので、和訳して参考に供したい。）

(4)各グレードの基準は日本よりもかなり高度である。

(5)各選手は相当に多量のトレーニングを消化しており、握力、腕力、脚力等の基礎体力に優れ、指には「岩登りタコ」ができている。

(6)岩場におけるトレーニングでは、4～5ミリのワイヤーロープを滑車でつるして確保をしたうえ、フリークライミングを主体として行っている。

(7)クライミングには豊富な体力を利して、強引とも見えるような腕力とフリクションの利用により、すばらしい早さで登る。

(8)ジョイントで登るルートには、残置ハーケンは一本もない。これは日本と比較した場合大いに見習うべきことである。

(9)人工登はん用具で金属性のものは、ハンマーを除きほとんどのもの（ユマール、アブミ、ブランコ、ハーケン、カラビナ等）はチタン鋼でできているが、これを利用できる者は、軽さを要求される者すなわち、競技選手およびスポーツマスターに限られているようであった。また、カフカズの登山基地には鉄製のハーケンその他すべての登山用品が備えられており、アルピニストはこれらを借りて登山を行ない、消耗したもの以外を返すことになっているという話であった。

(10)金属性の用具以外はウール、羽毛品は別として、一般にお粗末であり、高価のようであった。また、ザイルは、ナイロン製を用いていたが、個人所有ではなく、驚くべき早さで下降するアブザイレンにも用いるにしては、長さはともかく（八〇m以上、9mm）かなり古びていた。

3、今後の方向（個人的提案）

(1)日本で競技会を行うことについては、他に専門の委員会等を設けて検討を加えるとしても、現在実行できるつぎの事項は、直ちに取り入れるべきものと思う。

(A)縦走、岩登り、冬山、沢登り等各山行を想定し、それに合った基礎体力養成のためのトレーニング要項を策定する。

(B)必要によって上記のためのトレーニング・センターを設立する。（とくに登山が国民体育として普及していることを考慮するならば

明確なスポーツとしての位置づけのためにもぜひ必要であろう。）

(C)とくに岩登りにあっては、安全と技術修得のために、適当なゲレンデを利用して、ソ連式のワイヤー・ウィンチを採用すべきであろう。

(2)国民体育大会における山岳種目の競技化および登山のスポーツとしての位置づけ確立をふまえて、ソ連式の競技会を日山協関係者が視察するのも有意義のことと思う。（因みに、一九七五年には男三人、女二人のチームを招く予定とのこと。）

(3)今回の参加要請は、世界アルピニズム連盟に加盟している各国に出されており、日本としてはJACが当初から加盟していたために、JACあてに来た文書を、たまたま新潟大学がパミール交渉をソ連邦と行なってきた経緯があり、JACのご厚意により代表として出場したものである。しかしソ連邦としては、これを単に連邦内大会にとどめず、国際的大会への発展を意図しており、日本へ帰ったらその趣旨を宣伝するよう要請された。したがって、これに対する何らかの方策もいずれは立てなければならないものと思う。

(4)東欧諸国およびオランダ等にはある程度スポーツ化（競技化）の動きがあるようである。

4、参考

(1)参加国—ソ連邦各共和国

その他—東独、ハンガリー、ブルガリア、チェコ、ポーランド、オランダ、アメリカ、日本

(2)競技方法

一九七一年の要項、別掲のとおり。

5、その他

大会のふんい気は、友好的であり、とくに遠来の日本に対しては、ジョイントで登ったアイ・ペトリのマルシルート（ルートの意）をヤポンスカヤ・マルシルートと命名するなど、最大限のサービスをしてくれた。大会終了後、ソ連邦のジャーナリストにコメントを求められ、日本の状況を話すとともにソ連への讃辞を述べた。幸い大会の模様を8ミリフィルムに撮ってきたので、何かの機会に発表することといたしたい。

Ⅳクリミア大会参加会計報告

1 収入

山の会募金　※二一〇、〇〇〇円

個人負担　五四九、六九〇円

2 支出

渡航費　六七七、六二〇円

渉外用土産品　一二、八二〇円

通信費　一五、〇〇〇円

写真（フィルム・プリント）

装備費その他　一三、〇五〇円

東京—新潟間旅費　一、二〇〇円

旅券　一〇、〇〇〇円

その他雑費　一八、〇〇〇円

計　七五九、六九〇円

（一九七三年十一月一日現在）

※なお、これ以降、数口のご寄付をいただいております。（詳細は追ってご報告します。）

一九七一年度ソ連邦ロッククライミング選手権試合に関する規定

一、目的および課題

ソ連邦選手権試合はつぎの目的で行われる。

—ロッククライミング技術における選手の達成状況

—ソ連邦のスポーツ組織におけるロッククライミング発達に関する経験の交換

—国民中のロッククライミングとアルピニズムの大衆化

二、開催時および開催場所

一九七一年十月二日より八日まで、〝クリミヤ岩〟にておこなわれる。

選手団の到着は十月一日ヤルタ市へ

三、競技の指揮

競技の指揮は、ソ連邦アルピニズム連盟によって行われる。

競技の直接的な挙行は、ソ連邦閣僚会議付属体育とスポーツ委員会アルピニズム部によって認められた審査委員会によって行われる。

競技場所の準備、配置、食事、参加者、団長、審査員の出迎えと見送りはクリミヤ州体育とスポーツ委員会が行う。

四、参加者の構成

競技に参加するのは〝体育とスポーツに関する委員会〟の申請にもとづいた市単位の選手団である。

競技の参加の許されるのは、一九七〇年と一九七一年の市選手権で良い成績を納めたスポーツマンのうちから〝ロッククライミングまたはアルピニズムにかんする熟練者候補〟以上の等級をもち〝体育とスポーツにかんするしかるべき委員会〟によって証明された調書のコピーによって確認されるスポーツマンである。

(注)一九七〇年、一九七一年に競技を行わなかった委員会は一九七一年ロッククライミングソ連邦選手権大会への参加はできない。

(団)の構成は六名、うち男三名、女二名、団長一名

(団)は、同一の制服、スポーツ組織の旗、しかるべき装備を身につけていなければならない。装備の名称および数はチーム独自に決定のこと。

五、選手権大会プログラム

競技は男子三種目、女子二種目でおこなわれる。

(a)男　参加人員　合格

1 二人競走　三人　二人

2 個人クライミング三人　二人

3 クリミヤ　一スピヤスカ

スピヤスカ　（二人）

一スピヤスカ

(b)女

1 二人競走　二人　一人

2 個人クライミング二人　一人

(注)クリミヤスピヤスカ競技には参加者は各人八Kg重量のリュックサックを所持のこと。

六、種目別参加条件

1、二人競走には全参加者が参加のこと。

2、個人クライミングの参加の許可されるのは、

a、二人競走の勝者

b、この選手権大会の第一種目の競走で勝者の中に入らなかった一九六九年度のチャンピオン

c、二人競走で破れたもののうち優秀な成績の女子五名と男子十名

3、クリミヤスピヤスカ種目に参加できるものは、

一チーム　一　スピヤスカ（二名）

七、参加者ならびに審査員の受入れの方法と条件

審査員の派遣、迷路の準備と設備、競技の挙行、到着日と競技期間中の参加者の食事の確保、競技場所までの輸送と配置に関する費用は〝ソ連邦閣僚会議付属体育とスポーツ委員会〟が負担する。

クリミヤの居住地区までの往路とそこからの帰路の参加者ならびに団長にかかる経費は派遣団体の負担するものとする。

競技参加者の所持するもの—パスポート　ロッククライマーまたはアルピニスト手帳

八、勝者の合格と決定

競技は、一九七〇年の補則による一九六六年の規定にしたがっておこなわれる。

全チームの合格者は、個人クライミングと二人競走種目で男子二名、女子一名、男子スピヤスカは一スピヤスカの成績優秀者がえらばれる。

スピヤスカによりよい成果を示したチームには均等に優秀賞が与えられる。

個人賞は各種目別に個々に与えられる。

男子〈二人競走／個人クライミング／クリミヤ、スピヤスカ、クライミング〉

女子〈二人競走／個人クライミング〉

九、表賞

第一位を占めたチームには〝ソ連邦閣僚会議付属体育とスポーツ委員会〟の優秀賞と第一級証明書が与えられる。

第二位、第三位のチームには、同様に第二級、第三級の委員会証明書が与えられる。

個人クライミング種目の男子、女子優勝者とスピヤスカの男子クライミング優勝者には一九七一年度ソ連邦チャンピオンの称号が与えられる。

また、彼らには第二級メダル—銀ならびに金メッキ製—とチャンピオン証明書が与えられる。第二位、第三位を占めた参加者には同様に銀製とブロンズ製メダルならびに二級、三級証明書が与えられる。二人競走の勝者には委員会の一級から三級までの証明書が成績にしたがって与えられる。

総合成績で最上位を占めた男子および女子には一九七一年度ロッククラ

イミング多種競技〝ソ連邦チャンピオン〟の称号が与えられ、二級のメダル（銀と金メッキ）のチャンピオン賞が与えられる。

ロッククライミング多種競技ソ連邦チャンピオンと勝利チームを生んだトレーナーには、メダルと委員会証が与えられる。

十、申請

参加申請は、一九七一年五月一五日までにソ連邦アルピニズム連盟と同部あてに提出のこと。規定のフォームによる氏名申請は一九七一年の十月一日一七時までに審査委員会あて提出のこと。

ソ連邦アルピニズム連盟

（一九七〇年九月三十日、ソ連邦体育スポーツ委員会によって確認さる）

第十二回「この一本展」③

（松方三郎著作展）

出品目録・解題

『登高行』第一年第一号

渡辺　公平

僕の持っている『登高行』のうち第一号から第四号までは神田の古本屋で買ったものである。第二、第三号は淡青色のクロースで立派に装釘されたものだが、第四号はオリジナルのまま、表紙がいささかくたびれている程度だった。「一本展」に出品した第一号は裏表紙をいつの間にかなくしてしまったが、買った当時から背中などがだいぶ傷んでいた。

もちろん戦争前のことである。いくらだったか値段も忘れてしまったが、ページを開いたとたん、見返えしにご覧のような献呈の辞が目に入った。

献呈者が節二、贈られた人が孝雄とある。

節二というのが、槇さんと共に慶応義塾山岳会を創立した内田節二さんであることはすぐわかったが、孝雄という人物は見当がつかなかった。今でも確しかめたわけでないから断定はできないが、日本山岳会の会員として活躍した故黒田孝雄さんではないだろうかと、僕なりに想像している。

この第一号の中に「慶応義塾山岳会設立の次第」というのがあるが、それによると、山岳会設立便宜の為槇、内田両氏共に日本山岳会に入るとある。大正三年のことで、その後数回山岳会の幹事高野氏を訪問、準備を進め翌年六月に設立された。第一号の刊行されたのは大正八年である。

「…五年前孤々ノ声ヲ挙ゲテヨリ、登高、奮闘勇健シテ漸ク此ノ小誌ヲ出版スル迄ニナリマシテ嬉シクテ堪リマセンカラ、一冊進呈シマス」という編集者としての喜びが眼に浮ぶと同時に、若い登山家としての自負が、それに続く次の文字によく現われていて、わが登山史の一断面を見る思いがするのである。

「此書ヲオ読ミニナリマシタラ真事ノアルペンニストヲ御解リニナルコト丈ケハ確信アリマス」

六華倶楽部記録に就いて

一、六華倶楽部宿泊帳　大正十四年一月起

二、六華倶楽部芳名録

三、宿泊者自由帳（らく書帳）

水野　公男

会報『山』三三五号掲載の六華倶楽部緑樹山荘の記録六点の中から、三点を五色温泉宗川旅館より特に「この一本展」に出品するために貸出し願ったところ、心よく承知願い展示することが出来た。

この記録から、今は日本山岳会の長老、大先輩の方々がかつて若かりし頃の一端をうかがうことが出来る。

秘境ネパールの新聞記事

野生司　香雲

東京朝日新聞　昭和九年一月十日

昭和九年二月十五日

村井　米子

野生司画伯は、この春九十歳余で長野辺で逝去と聞きました。インドで仏画を描き、また、ネパール鎖国当時、王室よりまねかれてその国に入っています。これは、その珍しい新聞記事です。

わたくしのスクラップ帖より。

Amog the Tibetans by I.L. Bishop.

ジャコ・ギャルモ旧蔵

エッケンシュタイン署名本

雁部　貞夫

この本そのものは、カシミール、ラダックから西チベットにかけて、著者が一八九〇年代に旅行した折の見聞を記した紀行で格別めずらしい種類の本ではない。

ただ、私が興味をもったのは、その本の裏表紙に、ジャコ・ギャルモの蔵書票がはってあり―K2をデザインした―、しかも、エッケンシュタイン（一八五九～一九二一年）の自署があることである。恐らくエッケンシュタイン死後、カラコルム同行（一九〇二年）の友たるギャルモの所蔵本となったのだろう。その蔵書票のデザインのもとになった写真が、彼の著者『ヒマラヤ六ケ月』にのっている。

深田さんの九山山房にもこれと同じ事情の本が数冊あり、深田さんは「K2を現わした蔵書票」という文書の中でそのことを詳しく記している。深田さんはその中で、ギャルモの本の二七六ページの写真がその蔵書票のもとになったと書いているが、私は、それともう一枚、二七五ページ対頁のK2の写真を合成したデザインだろうと考えている。参考のために『ヒマラヤの六ケ月』中のその写真を並べておこう。

さて欧米人の蔵書票の常として、ラテン語やギリシャ語の箴言がこの本にも記されている。どういう意味のラテン語かよく判らぬが、「一本展」当日まで、誰方かに伺って、その意味を明かにしておきたい。

付記すれば、この本の石版刷りの挿画は、E・ウィンパーによるものである。恐らく、写真に基づく仕事であろう。ウィンパーと中央アジア、その関わりは予想外のものがあろう。ウィンパーはその晩年、中央アジアやヒヤラヤに相当の関心を持っていたのではなかろうか。その類の本を何冊か私は目にしている。

『山水無尽蔵』の意義

山下　久男

小島烏水氏は多くの山岳紀行文をものされている。この『山水無尽蔵』もその中の一つ。

「鎗ケ嶽探検記」「乗鞍嶽に登る記」「浅間山の煙」「飛騨縦断記」「日本海の虹」「秋の木曾街道」の六篇からなっている。島崎藤村は「思ふに氏のごときは新代精神を以て遠き祖先の志を行ふものといふべし」と序している。小島氏自身その自序で「余が遊べるところ、多くは日本アルプス中の高山大岳にして、従来世に聞へざりしものなり」と述べている。氏が鎗ケ岳の頂上にたたれたのは明治三十五年八月十六日であった。探検という文字を使っても不思議とせられなかった程、人が北アルプスにあまり入らなかった時代で、自然も美しく、そこに僅かに住む人たちも素朴そのものであった。ウェストンは十年前の明治二十五年に槍ケ嶽登山を機会に小島烏水を知り、本会の生まれる気運を作ったといわれている。そういう意味でもこの紀行は記念的著述とみられる。烏水氏の三十余冊の著述の中でも、私がとくに珍重し、愛蔵している所以である。

一、書名　山水無尽蔵

一、著者名　小島烏水

一、発行所名　隆文館

一、発行年月日　明治三十九年七月三日

（完）

図書紹介

『ヒマラヤ編年誌』I

マルセル・クルツ

水野　勉訳

クルツの《Chronique Himalayenne》がディーレンフルトの『第三の極地』やメイスンの『ヒマラヤ探検登山史』や深田久弥の『ヒマラヤの高峰』と並んで、今日ヒマラヤの登山史を研究する者が欠かすことのできない文献であることは、も早や多言を要しない。深田氏も『ヒマラヤの高峰』執筆に際して、クルツをしばしば引用したことは、よく知られている。ディーレンフルトもメイスンもすでに邦訳されているが、ひとりクルツだけはまだそれがなされなかった。

このたび水野勉氏によって、その翻訳が行なわれたことはよろこびに堪えない。もっとも今回刊行されたのは、

訳本として第一分冊（一九四〇～四六年間）で、原本の序文と本文一～五〇ページまでであり、以下ⅡⅢと分け三分冊の形で一九五二年までを翻訳刊行の予定であるという。原本は五五年までを扱っているが、訳者の目下の計画では五二年で止めるというが、なるべくなら完訳が望ましく、さらには『補遺』として後年出されたものも、この際一緒に翻訳の対象にとりあげてほしい。

訳文は読み易く訳者の労を多とするが、ごくわずかに個有名詞のカナ書きに不統一があり、また不適と思われるもののあるのに気づいた。日本山書の会発行とあり、部数もごく限られたものと思うが、総アート紙で印刷もきれいであり、良心的な出来栄えは好感がもてる。望むならば写真の印刷が一段とよくできなかったものか。

ともあれ原本は一九五九年、発行部数六〇〇部というから、現在では入手にかなり困難があろう。それが邦訳で読めることは、その意義が少なくない。

（望月達夫）

近代登山の先駆者たち

近藤　信行編

昨年十二月日本橋丸善で開催した小島烏水、木暮理太郎、岡野金次郎生誕百年記念展に際し、目録として編集したものである。目録とはいってもただの目録ではない。三岳人を中心に日本における近代登山の幕あけを克明に再現したものであり、それは目次をごらんになれば一目瞭然である。

・記念展開催にあたって（今西錦司）・三人の先達（藤島敏男）・初期山岳会の人々（三枝守博）・ウェストン書簡と先駆者たち（織内信彦）・登山史上における三岳人の位置（山崎安治）・先蹤者のおもかげ（三田幸夫）・山に向う心（串田孫一）・日本文化と山の歴史（色川大吉）・つながりということ（松永敏郎）・山岳編集者としての烏水・理太郎（望月達夫）・珍しい英語の序文（吉沢一郎）・書斉の岳人たち（島田巽）・木暮先生と霧の旅会（山崎金次郎）・木暮先生御夫妻の晩年（野口末延）・兄小島久太の思い出（小島栄）・山王台交友録から（小島隼太郎）・思い出すままに（木暮美枝子）・父岡野金次郎（岡野敬次郎）

ざっと以上のとおりで、これにいちいち説明を加えることは一つもない。さらに資料として・その頃の思い出（小島烏水）・滝沢秋暁あて書簡抄（烏水）・ウォルトン「日本と台湾の登山記」序（烏水）・「鶏肋」より赤城山紀行（理太郎）・一ノ倉懐古（理太郎）・日記抄（金次郎）とこれまで未発表のものがずらりと並んでいる。

資料紹介としては「烏水の手紙」（近藤信行）・「鶏肋」と「支那星図稿」（神原忠夫）・岡野金次郎日記（石川治郎）とこれまたきわめて貴重な資料が紹介され、最終に三氏略歴、主要出品目録となっている。

まさに日本山岳会ならではの刊行物であり、長く記念として保存されるべきものである。

昭和四十八年十二月二十四日日本山岳会発行、A5版一二七ページ、頒価千円（送料二百円）

霧の旅（覆刻版）

木暮先生追悼号

本号は「霧の旅」の会誌で、木暮理太郎氏が亡くなられた直後の昭和十九年十月八日、第十九年第五十四号として霧の旅会から発行されたものである。がり版ずりだが、題字は武田久吉氏が筆を取られ、生前の木暮氏の写真二葉、スケッチ二葉、筆跡一葉が写真でそのまま巻頭を飾っている。

内容は、「絶筆」、未発表の「信甲旅行日記」をまず載せており「絶筆」は文字通りの絶筆で「……」は水平に一は垂直に……」で終わっている。「信甲旅行日記」は、明治二十九年八月の御岳、木曾駒、甲斐駒の登山記を中心としたものである。

武田、田部重治、尾崎喜八、荒井道太郎、村尾享、小池新二、鶴岡元之助、吹原不二雄、柴山登茂次、野口末延、神谷恭の諸氏がそれぞれ追憶を寄せており、とくに武田氏のものは、くわしく大正初期の木暮氏との山行の模様を述べている。また鷹見安二郎氏は「木暮先生と東京市史編纂事業」の一文でわれわれが知っている登山者とは別の木暮像をはっきり画いており、まことに興味深い。

今回三岳人展開催に当り、三百部限定で、原本のまま覆刻した。

覆刻版昭和四十八年十一月二十五日日本山岳会発行、一八二ページ、頒価二千五百円（送料二百円）

会務報告

三月理事会

（三月二十二日本会ルーム）

▽出席者　今西会長、中屋副会長、板倉、伊倉、春田、宮下、丹部、帰山各理事、今井監事、望月、山崎、金坂各評議員、高遠、小倉各委員、委任、織内副会長、近藤、浜野、神崎、浜口各理事

△議案

・昭和四十九年度事業計画案および収支予算案の件　（板倉、伊倉）

原案について検討の後、提案どおり承認、文部省に届出をするとともに、通常会員総会にはかることにした。なお年度末で約五〇〇万円の繰越金が見込まれるが、従来特別会計（終身会費積立金、図書購入積立金等）が一般会計の繰越勘定に含まれておったので今後別個に経理することにしたい。

了承

・監事任期満了につき候補者推薦の件　（板倉）

村尾金二、今井雄二両氏が任期満了となるので、留任願いたいと申し入れ両氏から内諾を得ておるが定款第十四条第二項の規定により明二十三日の評議員会で候補者として推薦願い通常会員総会にはかることにしたい。

了承

図書室便り（昭和49・3）

新刊図書受入報告

京都山の会寄贈

(1)京都山の会編『渓谷―渓谷溯行資料―I』昭和48

朝日ソノラマ寄贈

(1)朝日新聞前橋支局編『谷川岳』昭和49

東洋大学山岳部寄贈

(1)東洋大学山岳部『茜―東洋大学八十周年記念アラスカ遠征報告書―』昭和42

関田美智子氏寄贈

(1)山岳同人凌雪会『蒼昊に翔る―一九七二マッキンレー南壁西稜登山及び遭難報告―』昭和49

井口邦利氏寄贈

(1)東京電機大学二部山岳部『ティロット谷一九七二』昭和49

内田嘉弘氏寄贈

(1)京都山友クラブ『韓国・智異山登山報告書一九七二』昭和47

日高信六郎氏寄贈

(1)第一高等学校旅行部縦の会編『一高旅行部五十年』昭和43

湯浅道男氏寄贈

(1)藤木高嶺著『ああ南壁―第二次RCCエベレスト登攀記―』朝日新聞社昭和49

定期刊行物受入報告

〔部報・会報〕

(1)『北海道自然保護協会・会誌』No. 12 (1974)

(2)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 82 (49-3)

(3)『いこいの山岳会月報』No. 150/151 (49-2/3)

(4)日本地図資料協会『古地図研究』No. 48 (49-2)

(5)国立公園協会『国立公園』No. 291/292 (74-2/3)

(6)京都山岳会『京都山岳』No. 587 (49-3)

(7)東京野歩路会『山嶺』No. 515～516, 518～527 (48-4～49-3)

(8)長野県山岳協会『山岳協会ニュース』No. 33 (49-3)

(9)日本自然保護協会『自然保護』No. 142 (49-3)

(10)低い山を歩く会『低山』No. 105 (49-3)

(11)神奈川県山岳連盟『ときわ木』No. 39 (49-3)

(12)日本山岳協会『登山月報』No. 58 (49-1)

(13)日本登山協会『山と雪』No. 190 (49-3)

〔雑誌〕

(1)『アルプ』No. 193 (49-3)

(2)『岳人』No. 322 (49-4)

(3)『岩と雪』No. 36 (49. Spring)

(4)『山と渓谷』No. 427 (49-4)

〔その他〕

長野県山岳総合センター寄贈

(1)『夏山の踏査研究―自然保護のために第2集―』(49-3)

〔海外雑誌〕

1. "Appalachian bulletin" Vol. 40, No. 1. Jan. 1974.
2. "Der Bergsteiger" '74-1.
3. "Chicago Mountaineering Club. The newsletter" Vol. 27, No. 2. Jan. 1974.
4. "Deutscher Alpenverein. Mitteilungen" 26. Jahrg. Heft. 1. Januar/Februar, 1974
5. "Rivista mensile" Anno. 94, N. 10. Octobre 1974.
6. "Sierra Club. Bulletin" Vol. 58, No. 8, 10. Vol. 59, No. 1, 2. Sept. 1973 Feb. 1974.

製本報告

和書

(1)『山と溪谷』No. 412～423　四冊
(2)『岳人』No. 307～318　三冊
(3)『アルプ』No. 180～191　二冊
(4)『低山』Vol. 8～12　二冊
(5)『京都山岳』No. 549～572　一冊
(6)『国立公園』No. 254～289　一冊
(7)『岩と雪』No. 29～33　二冊
(8)『近代登山の先駆者たち』　五冊
(9)『自然保護』No. 92～139　二冊

洋書

1. "The Amarican Alpine Journal" Vol. XVII, No. 1. (1970)
2. "The Amarican Alpine Journal" Vol. XVII, No. 2. (1971)
3. "Rivista mencile" Anno. 93, No. 1-12. (1972)
4. "Deutscher Alpenverein. Mitteilungen" 23-25 Jahrg. (1971-1972)
5. "Appalachia" (1970-1971)
6. "Appalachian bulletin" Vol. 38, (1972)
7. "The Geographical Journal" Vol. CXXXVII. (1971)
8. "The Geographical Journal" Vol. CXXXVIII. (1972)
9. "Alpinismus" (1973)
10. "The Canadian Alpine Journal" (1970-1973)
11. "The Himalayan Journal" Vol. XXVII-XXIX. (1966-1969)
12. "The Himalayan Journal" Vol. XXX, (1970)
13. "The Himalayan Journal" Vol. XXXI. (1971)

ルーム日誌（49年3月）

1日（金）理事会
4日（月）集会委員会
6日（水）海外連絡委員会
7日（木）図書委員会
8日（金）自然保護委員会
13日（水）山岳史懇談会「一高旅行部の足跡」講師日高信六郎氏
〃　大木　操氏
15日（金）青年懇談会
19日（火）書評委員会
22日（金）臨時理事会
23日（土）評議員会
静岡大学の会
25日（月）集会委員会
学生部委員会
26日（火）学生部例会
28日（木）日大山岳部
29日（金）青年懇談会
三月中来室者　三四五名

会員異動

休会（49年3月）
四五〇八　宇田川允敏　テヘラン在住

退会（49年3月）
四二七〇　黛　治也
四九〇一　林　三重
五二一三　四倉源一
六〇四九　細田益造

物故者
三〇六　佐々木高美　昭和四九・一・九逝去
一四一八　宇田川久太郎　昭和四八・一一・二八逝去

訂正　会報三三九・三四〇合併号会務報告（一一頁）除籍者氏名欄中　六八六八　宮本公省、四五四三　丸山正博とあるを取消します。

自然保護委員会

冒頭、「連峯スカイライン」の現状について、二月末大沢山梨支部長を訪れた村井米子・渡辺公平両委員から報告あり、県岳連は地元との関係から反対運動はしない、J・A・C・支部も改組後日も浅く、反対の公式表明をしていないとの二点が確認され、この際本部として何らかの形で公式に反対態度を表明すべきであるという事で意見が一致した。なお三月下旬、武田満子、山本良三両委員が実情調査のため入山した。

しかし一旦着手すれば最早取返しのつかないことであり、県側の所謂「グリーン・プラン」についての資料を入手すること、現実に活動し得る若手を動員することなどが必要であるとの結論に達した。

あとがき

この号は、大先輩の原稿が大変多くなりました。若い会員も負けずにふるってご投稿下さい。次号は総会関係記事が中心となりそうです。（小倉）

昭和四十九年五月十日発行
東京都文京区湯島一―六―一
利根川商事㈱さくらビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　山崎安治
(813)二二八六(代表)
振替口座東京四八二九番
印刷所　東京都港区赤坂一丁目三番六号　株式会社　技報堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

遙かなる未踏の尾根
マカルー1970年
日本山岳会東海支部
〈B5判430頁・カラー64頁〉定価4,800円

ブータン感傷旅行
小方全弘著　〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河
加藤泰安著〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話
初見一雄著〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山
望月達夫著　〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に
大島堅造著〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山
川崎精雄著
〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと
坂本直行著〈B5判206頁〉定価2,800円

山日記1974年版
日本山岳会編
〈A6判342頁〉定価850円

山　岳
日本山岳会編
〈A5判〉
67年　2,500円
66年　2,300円
65年　2,000円
64年　2,000円
63年　2,200円
62年　2,000円
総索引　1,000円

国立公園カレンダー
国立公園協会編
〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然
赤星　昌編　〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集
戸野　昭・朝倉　宏編
〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

原野から見た山
坂本直行画文集
〈B5箱入布特製本〉定価4,200円

いろりばた
南会津山の会
〈B24どり判320頁〉定価1,900円

シプトンの自叙伝
未踏の山河
大賀二郎・倉知　敬訳
〈A5判440頁〉定価1,900円

日高山脈
北大山の会編
〈菊判362頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ
藤島敏男著　〈菊判584頁〉定価2,500円

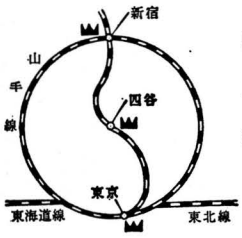
日本の山旅
足立源一郎スケッチ帖
〈A変型208頁〉定価3,600円

登頂ゴジュンバ・カン
高橋　進編　〈A5判350頁〉定価900円

登山・スキー用具専門店
山の店
大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買い易い 山の店
●北へ来たら 山の店
●フレッシュな 山の店

山とスキーの専門店
片桐
東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店　東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店　東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店　新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社 たかはし

登山とスキー具
イワタ
東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718

登山用具の専門店
好日山荘
東京店・中央区銀座3－5－7　(561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3－4－6　(561)0966　スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47　(364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1－4　(28) 3440